

「軽薄」 unit circa 's

□舞台上、それは紀元前15000年前。

ヨル子NA

「昔、私の知らない遥か昔、猿が人間になって少し賢くなった頃。
言葉を知らなかった頃。それでもコミュニケーションをとっていた頃。
今よりもできない事がたくさんあって、それは今よりも未来にできる事が
たくさんあるって事で、イメージとしては広いっていう事。
生きるために未来を、今よりも良くする為に未来を、
切り開く、切り開く、猿が少し賢くなっただけの人間の生命力」

☆猿Aが木を擦っている。そこに猿Bがやってくる。

猿B「(以下アフレコ)おい、何してる」

猿A「あ、こんにちは。えーと」

猿B「気にするな、この時代に名前なんていう概念は無いんだよ」

猿A「あ、そうか、えーとじゃあお前」

猿B「よし、俺はお前だ、そしてお前は」

猿A「俺だ」

猿B「じゃあ俺はお前で、お前は俺だ」

猿A「ん…うん」

猿B「で、何をしてるんだ、その、それをそうして」

猿A「いやね、さっき、偶然これをこう、ゴシゴシってやったら、
なんか変になって」

猿B「変に？」

猿A「ちょっと見てろよ(ゴシゴシ)」

猿B「うん」

猿A「(ゴシゴシ)」

猿B「うん」

猿A「触ってみろ」

猿B「うん、熱っ！なにこれー」

猿A「これ凄いよね？」

猿B「うん凄いね」

猿A「これずっとやってたらもっともっと熱くなるよ」

猿B「え？まじかよ、ちょっと貸して」

☆ 猿Aゴシゴシ、猿Bゴシゴシ

ヨル子NA

「人間は激しく擦ると何かが出てくるという事を覚えました。
生きる為に、擦る、激しく擦る。」

☆ 恍惚の表情の猿A, 猿B

猿A「iiiiiiiiiiいやあああああ」

猿B「うううううあああああ」

猿A「あっ」

猿B「火だ」

ヨル子NA

「これが、火の誕生です」

暗転。

スクリーンに文字

「1万7000年後」

SEドーン(爆発音)

映像キノコ雲。

ヨル子NA

「人間の生命力が、私の人生を強姦した」

□OP映像前半

クレジット

「作・川尻恵太」

「浅野広子」「井上亮介(yhs)」「山下カーリー」「楽太郎」

「スペシャルゲスト 谷口健太郎(プラズマニア)」

☆映像OUT MEは続いている

舞台上は手紙だらけ。2人の男が手紙を拾っている。

戦場の手紙屋松本と、刑務所の手紙屋岡本。

松本「アーツ」

☆ イライラしたように手紙をまたばら撒いて。
前を向いて話し始める

松本「私は、戦場で手紙の検閲みたいな事をしているんですが、
毎日毎日、こう文字に囲まれていると、本当の意味で、
言葉の壁ってやつに囲まれている気分になります。
仕事とはいえ、人の手紙を、勝手に開けて読むわけで、
気持ちのいいもんじゃないんです。
この前も凄くエッチな内容の手紙が来まして。
一部ご紹介しましょう」

☆手紙を一枚読む

松本「ヨンスはビヨンホンのビヨンビヨンとした所を、
火照ったアニョでハセヨした。スミダは」

☆口パクになる

岡本が前を向いて話し始める

岡本「僕は、刑務所で手紙の検閲みたいな事をしているんですが、
最近困ってる事があまして、毎日たくさん手紙が送られて
くるんです。いや、それ自体は仕事なんで仕方が無いなあなんて
思いながらやってるんですけど、送られてくる手紙の大半が
一人の女性からなんです」

☆いきなり声が大きくなる松本

松本「たわわに突ったその2房のトッポギをこう！両手で！ガッチリと！
トングで挟み込み！」

岡本「あの、僕、話してる途中なんですけど」

松本「あ、すいません。チンチンがビンビンになってしまっ」

岡本「知りませんよ」

松本「いや、間違った。違いました。チンチンがウオンビンになってしまった。
だった。」

岡本「チンチンの方を変えてくださいよ」

松本「間違った。言いたいのはそういう事じゃなかった。えーと。

私もなんですよそれ」

岡本「はあ？もう間に卑猥な言葉が入ったせいで、僕の言葉を憶えてる人なんてほとんどいないですよ、何に同意したんですか」

松本「その、送られてくる手紙の大半が一人の女性からって部分」

岡本「ああ、そうだ、そんな事言いました」

松本「私もそれで困ってるんですよ」

岡本「そうなんですか？もしかしたら同じ女性からの手紙かも知れないですね」

松本「なんて人からですか？」

岡本「篠宮」

松本「はあ！！同じだ。同じ人だ」

岡本「篠宮ヒルコ」

松本「あっ違う人だ。苗字は同じですけど、こっちは篠宮ヨルコ」

岡本「ヒルコと」

松本「ヨルコ……」

岡本「ちょっと見せてください、ヨルコさんの手紙」

松本「あ、いいですよ。えっとこれなんてどうですか？」

☆ 渡そうとするが間に何かがあって渡せない

松本「あれ？」

岡本「そういえば、さっき少しか不思議に思ったんですけど。

あなた今どこにいるんですか？」

松本「私ですか？私は今、イスラエルにいます」

岡本「(出していた手を引っ込めて)なるほど、じゃあその手紙を僕は読めないわけだ」

松本「え？」

岡本「だって僕は今、新潟にいるんですから」

松本「新潟、米どころですね」

☆ お互いに「ハッ」として、それぞれに手紙を拾い始める

松本「やばいやばいやばい、白昼夢だ、白昼夢に違いない」

岡本「やばいやばい、仕事しないと」

☆お互いに振り返る

2人「振り返ると、そこに彼はもういなかった」

☆ 2人手紙を拾っては差出人を読む。
その殆どはヨル子とヒル子である。

松本「ヨル子」

岡本「ヒル子……」

徐々に暗転して行って、

□ OP映像後半

クレジット

「今井香織」「氏次啓(劇団ギャクギレ)」「荻田美春(3ぺえ団札幌)」

「塚本雄介」「演出・ツルオカ」「プロデュース・上田知」

映像がOUTして、ヨルコに照明。

ヨルコ「先輩へ、これが初めての手紙になります。生きてますか。

死んでませんか。死んでいたらこの手紙はどうなってしまうので

しょうか。誰にも読まれないまどこかに捨てられてしまうので

しょうか。それでも私は手紙を書きます。私がこれを書いて、

先輩がこれを読む。それだけが私たちの繋がりになるのですから。

先輩がいなくなって、すぐにこれを書いています。

ようするに、先輩はさっきまでここにいたんです。」

☆明かりが広がる。店長が立っている。

店長「揺れるよなあ」

ヨルコ「え？」

店長「え？聞いてなかったの？俺凄いたくさん話してたよ」

ヨルコ「ごめんなさい、最初からいいですか？」

店長「だって俺、2時間話しかけてたんだよ？」

ヨルコ「あっじゃあ、要点だけ」

店長「色々な話したんだけど」

ヨルコ「要点だけ」

店長「要点だけな、枝豆おいしいよね」
ヨルコ「はい」
店長「スクワットって疲れるよね」
ヨルコ「はい」
店長「枝豆おいしいよね」
ヨルコ「？」
店長「あ、ここでもう一回来たんだよ、枝豆の話が」
ヨルコ「あー、はい」
店長「時給下げていい？」
ヨルコ「嫌です」
店長「あと、店の前をさ、戦車が通ると揺れるよな」

☆SE店の前を戦車が通る

ヨルコ「揺れますね」
店長「要点はそれ。それだけの俺の2時間。薄いよね」
ヨルコ「はあ、まあ」
店長「篠宮！（抱きつこうとする）」
ヨルコ「やめてください」
店長「うん、やめる。こういうんじゃないよな。わかるわかる」
ヨルコ「私そろそろ交代の時間なんで、もう帰っていいですか」
店長「いや、いいんだけどさ。その肝心の、山田が来てないのね。交代する」
ヨルコ「え？先輩まだ来てないんですか？」
店長「うん、あと5分で来なかったら遅刻」
ヨルコ「いつも暇だから早く来るのに」
店長「なあ、交代前から、雑誌のコーナーで本読んでるよな、エロいやつ。
篠宮も、そういうの見るの？」
ヨルコ「見ないです」
店長「時給10円アップしたら見る？」
ヨルコ「時給10円……。少しなら」
店長「あげてやるよ」
ヨルコ「ありがとうございます」
店長「俺の目の前で見てね」
ヨルコ「考えておきます」

☆ 上手から、山田入ってくる

気付かない2人

店長「声出して読むんだよ」

ヨルコ「それは10円じゃ、ちょっと」

山田「店長」

店長「山田、違う。これはセクハラじゃないよね。だって時給を上げてるんだから、対価を支払ってるからね」

山田「シフト変えて欲しいんだけど」

店長「シフト変えない」

ヨルコ「先輩、おはよう」

山田「おはよ、いや、マジで困るんだって。変えてくれないと」

店長「変えるところも困るんだよ。今だってなんとかやりくりしてんだよ。シフトは変えない」

山田「赤紙が来たんだよ」

ヨルコ「え？先輩、赤紙って、あの赤紙ですか？」

山田「うん、ちょっとごめん、篠宮邪魔、店長と話してるから」

ヨルコ「ごめんなさい」

山田「戦争行かないとダメなんだよ、だからさ、シフト変えてくれよ」

店長「そんな事いきなり言われても」

山田「店長は赤紙来てないんだろ？俺はさ、来たんだよ。ママに聞いたらかこれって強制なんだって。だからシフト変えてくれよ」

店長「どこの強制なの？」

山田「国」

店長「国かあ」

山田「頼むよ」

店長「何曜日なら来れるとかあるの？」

山田「戦争が終われば来れる」

店長「じゃあシフト云々じゃねーよそれ」

山田「戦争が終わった次の週の水曜日に変えてくれ、月、火は戦争の打ち上げがあるだろうから水曜日に変えてくれ」

店長「いつなんだよそれ、いつの水曜日なんだよ」

山田「その辺は国に聞いてくれ。俺は知らん」

店長「なんだよそれ。困るよ。こっちはシフトギリギリで回してるんだよ。

山田が抜けたらまた新しいバイトを入れないといけないじゃないか。

面接面倒臭いよ。戦争行くなよ」

山田「俺もいきたくねーよ、でも、ママに聞いたところによると、

戦争行かないってなると、罰を受けるらしい。怖いだろ罰」

店長「罰を受けてシフトに入ってくれ」

山田「嫌だ、罰なんて受けるもんか、店長のわからずや！」

☆山田、店長を殴る

店長「殴ったな！、クビだ」

山田「ああ、やめてやるよ。こんなにもシフトを変えてくれないとは思わなかった。見損なっただけ店長」

店長「見損なうなあ！！俺は男だ！」

ヨルコ「あの、先輩」

山田「篠宮、こういう事だから。今まで世話になったな」

ヨルコ「私、先輩の事好きです。付き合ってください」

山田「篠宮……嬉しいけど、俺、戦争に行かないと」

ヨルコ「付き合ってください」

山田「あの、タイミングがすげえ悪いよ。なんで今なんだよ」

ヨルコ「今しかないよ、だって遠くに行っちゃうんでしょ？」

山田「ああ、イスラエルに行ってくる」

ヨルコ「付き合ってください」

山田「わかった、じゃあ戦争が終わったら考える。それまで全然考えない」

ヨルコ「やった、結構嬉しい」

店長「お楽しみのあるところ、申し訳ないが。ほらっ(本を投げる)餞別だ」

山田「これは……エロ漫画雑誌、バズーカ」

店長「戦争だけにな、頑張れよ」

山田「店長、さっきは殴って悪かったな」

店長「いや、いいんだ。おかげで目が覚めたよ。俺も20年前は」

山田「じゃあな！！」

ヨルコ「先輩！！」

☆山田去る

店長「風のような男だったな」

ヨルコ「先輩。私手紙書きます。それをあなたが読む事が。

私とあなたの唯一のつながり」

店長「さあ、俺達もあいつに負けてられない。篠宮、あいつのシフト入ってもらおうぞ」

ヨルコ「はい」

店長「ネコネコマート、夜の営業開始だ！」

ヨルコ「はい」

☆包帯だらけのヒルコが入ってきて

店長「いらっしゃいませー！」

ヨルコ「いら……………」

店長「どうした篠宮？声が出てないぞ」

ヨルコ「ヒルコ……」

ヒルコ「お姉ちゃん、今日遅番だっけ？」

☆ヒルコその場にある箱に座る

ヒルコだけに明かり

ヒルコ「先生へ、初めてお手紙書きます。そこは寒いですか。

快適ですか。噂ではとても狭いところだと聞きました。

先生は狭いの好きだから平気ですよ。私とアレをしてる時、狭くて気持ちいいと何度も言っていましたよね。

私はあの頃よりも少しだけ幸せですよ。

だから心配しないで、お元気で」

☆明かり広がる。ソラコが立っている。

ソラコ「昨日はごめんねえ」

ヒルコ「何が？あー、これの事？」

ソラコ「その事」

ヒルコ「たいした怪我じゃないからいいよ」

ソラコ「わざとじゃないんだよ、間違えてヒルコを窓から落としちゃったの」

ヒルコ「わざとじゃないんですよ。あやまらなくてもいいよ」

ソラコ「でも怪我しちゃったから一応あやまるよ。ごめんね。で、

今日は持ってきてるの？お金」

ヒルコ「お金」

ソラコ「そうお金。ヒルコがここにいてもいいっていう許可を買うお金」

ヒルコ「それを私がソラコに払うの？」

ソラコ「え、まだわかってなかった。伝わってなかった。怪我したのに」

ヒルコ「だってソラコもヒルコもここの生徒なんだからここにいてもいいでしょ」

ソラコ「だめだこの子話聞いてくれない」

☆リクコ入ってきて

リクコ「なに、また？」

ソラコ「また」

リクコ「いいよ、ソラコ私が言うから。ヒルコさ」

ヒルコ「ん」

リクコ「あのさ、自分が今どんな感じかわかってる？」

ヒルコ「怪我してる」

リクコ「見りゃわかるよ、わたしゃ目腐ってんのか。目良いつつの。

両目2.0だったの」

ソラコ「そういう所がさ、なんか癩に障るんだよ」

リクコ「(ヒルコの髪の毛掴んで)またちょっと遊ぼうか」

ヒルコ「痛いよリクコ」

☆袖から声

コオロギ「あっ、こらこらこらこら」

☆ いいながらコオロギ出てくる

ヒルコ「あ、先生」

リクコ「(髪を離して)なんですか」

コオロギ「おま、おま、今、ヒルコの髪それ、掴んでたろ」

リクコ「掴んでないですよ」

ソラコ「そうですよ」

コオロギ「だって、みてみてたぞ。今グッてやっただぞおま。

せんせが廊下とりかかったからよくやったものの。

今髪、あれあれしてたろ」

リクコ「何て言ってんですか」

ソラコ「気持ち悪いな—コオロギ」

コオロギ「おまいま、せんせに向かって気持ち悪い言ったか。

内申点！」

リクコ「出たよ、職権乱用」

コオロギ「内申点って書くぞ、おまのおっばいに内申点て書くぞ。

右が内申、左が点だ」

ソラコ「セクハラなんですけど」

ヒルコ「(下を向いて笑っている)」

コオロギ「ちょどいませんせ、マジクペンを持ってるから書くぞ」

リクコ「手震えてんじゃん」

コオロギ「大人をなめるな、公務員だぞ」

☆コオロギ、ソラコに飛び掛る

ソラコ「痛い」

リクコ「やめろよコオロギ」

ソラコ「こいつ力超強いよ」

☆ソラコに馬乗りになるコオロギ

適当に歌うヒルコ

ヒルコ「♪正義のヒーローは、女子高生をなぎ倒し。身体を触る。

コンプレックスの塊♪」

☆渡が入ってきて

渡「何してんだ」

ヒルコ「歌ってる」

リクコ「あ、渡。ちょっと助けて、ソラコが」

渡「あ、うん」

☆渡コオロギを思い切り蹴り上げてコオロギは失神する

リクコ「大丈夫ソラコ」

ソラコ「うん大丈夫」

渡「コオロギか、あぶねーの」

ソラコ「ありがと、渡、助かったよ。もう少しでおっばいになんかされるところだった」

渡「いや、いいけど、何？なんでこんななったの？」

リクコ「別になんでもないよ、勝手にそいつがブチ切れて」

ヒルコ「♪それーはリクコがヒルコの髪を一♪」

リクコ「歌うな」

渡「篠宮」

ヒルコ「渡君」

ソラコ「(何かを思いついたように)あ、渡ってさ。童貞？」

渡「は？いきなり何だよ」

ソラコ「(渡を端に連れて行って)ぶっちゃけどうよ？笑わないから」

渡「ん……童貞」

ソラコ「なるほどなるほど」

リクコ「ちょっと、何話してるの？」

ソラコ「(手でリクコを制して)いやね、助けてもらったから、お礼と言っちゃ
難なんだけど」

渡「え？やらしてくれるの？」

☆リクコは、ヒルコの髪の毛を指で遊ぶ

ソラコ「…うん」

渡「まじかよ、いつどこで、どうやってどうやってやるの。穴ってさどこにあるの」

ソラコ「落ち着け男子、私じゃない。相手は私じゃない」

渡「え、誰。リクコ？」

リクコ「呼んだ？」

ソラコ「呼んでない、違う。渡の大好きな篠宮さんなんてどうかなーなんて」

渡「し、篠宮と、でも、篠宮なんか大怪我してるし」

ソラコ「萌えない？」

渡「萌える、それは萌える。包帯アイドルの写真集持ってる。でも、いいのか。
篠宮はオッケーしてくれるのか」

ソラコ「大丈夫。あの子ああ見えて結構エロいから、最初は嫌がるそぶりを見せるかもしれないけど、本当は強引にこられるのが大好きなんだよ」

渡「まじかよ、メモしていいか(メモする)」

リクコ「おい、何の話？」

ソラコ「面白い話、久々に部室使うよ」

リクコ「あっちゃーそういう事かあ。可哀想、ヒルコ」

渡「で、いつどこで」

ソラコ「今案内するから簡易ラブホ」

☆そのやり取りをポーッと見つめるヒルコ

ソラコ「帰ろうヒルコ」

ヒルコ「うん」

ソラコ「その前に、忘れ物しちゃったから部屋付き合って」

ヒルコ「いいよ、何忘れたの？」

ソラコ「友情」

ヒルコ「？」

ソラコ「体操着忘れた」

☆ソラコとヒルコはける

渡「あのさ、ゴム無いんだけど」

リクコ「私持ってる、(財布からコンドーム出して)こちらは別料金です」

渡「いくら？」

リクコ「500円」

渡「高えー、でも背に腹は変えられないよな。できたら困るもんな」

リクコ「まいどあり、それじゃ、一名様ご案内」

☆リクコ、渡の背中を押してはける

倒れているコオロギ。立ち上がり、箱に座る。

コオロギ「篠宮くん、僕は今、狭いところにいます。

君は僕に手紙を書くといったけど、どうやらまだ僕の

元に君の手紙は届けられていません。

君は人を疑う事を知らないというのか。

流れに任せて生きているというのか。

そういう綺麗で、薄弱なところがあるから。

先生は、罪悪感に囲まれたこの空間で、君を案じているのです。

幸せなら、それでも君が、幸せだというなら。

それが一番いい事だと、先生は思っている」

☆コオロギのいない方に明かり。そこにヨルコが立っている。

コオロギは去る。

ヨルコ「この日ヒルコはいつもより、2時間ばかり遅く帰ってきた」

☆コオロギが去った方向から、包帯と着衣が乱れたヒルコが帰ってくる

ヒルコ「ただいま」

ヨルコ「おかえり」

ヒルコ「……………大丈夫だよ」

ヨルコ「ヒルコ、学校楽しい？」

ヒルコ「うん」

☆明かりがヨルコだけに。

ヨルコ「先輩へ、また手紙を書きました。私をご覧の通りです。

　　そういえば、先日。先輩のお友達の、姫神さんが尋ねてきました。

　　住所も教えた事ないのに。彼は突然やってきたのです」

☆明かり広がるとそこに姫神がいる、金魚に餌やってる

姫神「日本はまた負けるね。とは言っても。今回は国民の殆どが戦争に

　　協力的じゃないわけで、低所得者の中から徴兵するのがやっと、

　　この期に及んで経済が壊れるのが怖いんだよ。ま、山田は運が悪かった

　　って事だね」

ヨルコ「はあ、すいません、あんまりそういう事詳しくなくて」

姫神「いいんだよ女の子は、今の時代生めや増やせやとも言われなし、

　　勝つまで欲しがるとも言われなし。あるお金で好きなものを買う権利があるし。そりゃ女の

　　子は男の何倍も物欲があるからして、

　　そんな事をわかった上で規制するってのは体質としてどうよって。

　　ちゃんと理解のある政治家がいるって事だねえ」

ヨルコ「あれは、嫌ですよ。街中を戦車が走って「戦争に協力してください」

　　って言って回るやつ。朝5時くらいからやってるじゃないですか」

姫神「そうでもしないと忘れちゃうような戦争だからね。ま、今さら、

　　平和だのなんだののたまう気はこれっぽっちもないんだけども、

　　あ、餌あげすぎた」

ヨルコ「で、今日は、」

姫神「ん」

ヨルコ「今日は何の用ですか」

姫神「あ、いや、篠宮さ、俺と何回か遊んでるじゃない。もちろん、

　　山田とか他にいたけどさ」

ヨルコ「はい、ポーリングとか」

姫神「そうボーリングね。負けた人がジュース奢りとか言って。きょうび、
ジュースをかけるかね。別にいいだろ自分で買ったって」
ヨルコ「はい、ジュースは自分で買って別にいいと思います」
姫神「あ、また脱線した。そしてまた餌をやってしまった。餌って
こうドバァーっとあげたいよね」
ヨルコ「あの」
姫神「えっとなんだっけ、そう、何回か遊んで俺の事どう思ったかなと
思って」
ヨルコ「どう？」
姫神「あるじゃん色々、素敵とか、気持ち悪いとか、人、だなあーとか、
好きだとか」
ヨルコ「あの、私、山田先輩に告白したんです」
姫神「(金魚に餌をドバッとあげる) あっそう」
ヨルコ「聞いてませんでした？」
姫神「うんうん、聞いてないけど、どうでもいいんだよ、別に。それを踏まえて結婚してくれ、早い、
早い、えっと俺とおお、俺と」
ヨルコ「先輩に告白したんですよ」
姫神「何で二回目言ったの？聞いてないと思ったの？聞いてるよ。
この距離だもん。それを踏まえて、ふーまーえーて、俺と、男女の垣根を越えてくれないか」
ヨルコ「先輩に告白したん」
姫神「それはわかってるよ！！それは答えじゃないじゃないか。逃げだよ。
それは俺に向かってくる直球じゃないもん。なんか牽制で刺すみたいな、
そうそれは一塁に向かって投げている球だ！だからバッターボックスに
立っている俺には届かない！」
ヨルコ「じゃあ付き合いません」
姫神「ワンストライク」
ヨルコ「アウトでしょう」
姫神「あと二球、いいか良く聞いてくれ。例え君が俺を振ったとして、俺の
この君を好きだという気持ちは完全には鎮火されない、それが人間。
引きずるぞ、目一杯引きずるからな。跡残るぞ地面に」
ヨルコ「それでもごめんなさい」
姫神「ツーストライク、あと一球。どうしたら付き合ってくれる？」
ヨルコ「どうしたらって」
姫神「いいか、宇宙は広いぞ。果てしない果てしないぞ。そんな宇宙の
片隅で、ただ単に君の気まぐれで、一人の男の人生を少し変えちゃう気か！！変えちゃうな
よ俺の人生」

ヨルコ「変えちゃいます、ごめんなさい」
姫神「スリーストライク、アウト、2番、バッター、俺」
ヨルコ「アウトで終わらないんですか」
姫神「あとツーアウト、変わっちゃうぞ、じゃあもう凄い変わるぞ。
擬音で言うと、なんだ、ガラッ！ そうだ、ガラッと変わるぞ。
篠宮、神様って知ってるか」
ヨルコ「はい、なんとなく」
姫神「神様って何だ？」
ヨルコ「偉い人、世界を作った人、えーと、あと」
姫神「それから！」
ヨルコ「運命とか、そういうのを作ってる人？」
姫神「そうだ、神様は大体そんな感じだ。良く聞け篠宮、神様は俺だ！」
ヨルコ「はあ」
姫神「お前が好き過ぎて、お前好きが高じて俺は神様になる」
ヨルコ「頑張ってください」
姫神「神様として言う、篠宮好きだ！」
ヨルコ「神様ごめんなさい」
姫神「何—！！消えてなくなれ—！！」
ヨルコ「ひい」
姫神「あっはははははあはははははは、無理だよ、今の俺には無理さ。
だけど篠宮、俺がもし神様に、本物の神様になったらその時は
付き合ってくれ！」
ヨルコ「わかりました、帰ってください」
姫神「言ったな、吐いた唾飲むなよ、きさ一ん(貴様)！次にお前の
前に現れる時、俺は神だ！」
ヨルコ「はい、帰ってください」
姫神「これ！お土産だ！」

☆姫神箱を投げ捨てて去っていく

ヨルコ「ありがとうございます(包み紙を開ける)」

☆ヒルコ入ってくる

ヒルコ「今の誰？」

ヨルコ「神様」

ヒルコ「は？神様何くれたの？」

ヨルコ「鳩サブレー」

ヒルコ「神様センス無いね」

ヨルコ「ていうか、ヒルコ、学校は？」

ヒルコ「なんかね、停学になった」

☆ヒルコ、ヨルコ、横を向く、照明が変わる。

コオロギ入ってくる。

深々とお辞儀をするヨルコ、3人座る。

ヨルコ「すみません、これ包み紙ビリビリですけど鳩サブレーです」

コオロギ「あ、ああ、気にしなでくださあ」

ヨルコ「私、この子の姉の篠宮です」

コオロギ「あ、たにんのイデオロギーです」

ヒルコ「担任のコオロギ先生」

ヨルコ「コオロギ先生、すみません家親がいなくて、この子と

2人暮らししてるんですけど、学校の事はあんまりこの子も

言わないし、私も仕事でいない事が多いんで。全然わかんなくて。

この子なんで停学になったんですか」

コオロギ「それがとてもいずらい事なんでけど、あの、こんなねが、

が学校じゆに、広まりましてー」

☆コオロギ携帯をいじる、ヨルコに見せる、小さく喘ぎ声が聞こえる。

ヨルコ、ヒルコをビンタ。ヒルコもヨルコをビンタ。

コオロギ「まてまて、まてください。えーと、シノミヤ、これ撮ったの

ソラコとリクコだりよ」

ヒルコ「(首を振る)」

コオロギ「しょかしよか、でもなあ、撮った人がいるんだな、それも

かにやりの至近こりで」

ヒルコ「これあたしじゃない」

ヨルコ「どうみてもあんただよこれ」

ヒルコ「画像が荒い」

コオロギ「言いたくにはいいのきや、それだたら、言わんでもいいよ。

でもにや、がこうとしては、第二第三の被害者を出したくないのによ」

ヒルコ「だからこれヒルコじゃないよ、だから知らないの、何も」

☆ヒルコ携帯をとって折る。ぐちゃぐちゃになる携帯

コオロギ「ああ、買ったばかりにやのに」

ヨルコ「すいません、弁償しますから」

コオロギ「いや、いですけりよ」

ヒルコ「ソラコもリクコも関係ないから、渡君も関係ないから」

☆ヒルコ帰ろうとする

コオロギ「ちょっと待て篠宮、先生、そんなに頼りないか。

この前は先生篠宮の事守れなかったもんなあ。凄く傷ついたらろ。

お前ぐらいの歳の子に残った傷って消えないんだよな、なかなか。

でもさ、また元気に学校来いよ、俺がお前を守ってやるからさ。

泣きたかったら俺がお前の泣き場所になるから。

教師コオロギマコト！篠宮ヒルコを守り続ける事をここに誓います！」

ヒルコ「先生」

コオロギ「笑顔で、帰って来い」

☆ヒルコ頷く

ヨルコ「あの、普通に話せるんですか？」

コオロギ「(いい声で)一日、三分だけです」

☆ヒルコに明かり

ヒルコ「先生へ、先生。あの時言ってくれた言葉、憶えていますか。

あの時まで、特に私の居場所だって指定された場所はなくて。

別にどこでも良かったんだけど。初めてオファーが来たから。

半ば妥協で嬉しかったんです。いい指定席じゃないけど、

三階席の最後列だけ。指定だから、開演ギリギリに行っても、

気分は楽っていう、そういう気分的な妥協をさせてくれてどうも

ありがとう。実はあの時のお礼まだ言ってなかったからこの手紙に

気持ちを乗せて」

☆明かり広がる

ソラコとリクコが談笑しながら入ってくる

ソラコ「そんで渡君、親に殴られたってさ」

リクコ「そら殴られるわな」

ヒルコ「おはよー」

ソラコ「(無視して) そういや、変な噂聞いた」

リクコ「おせーて」

ソラコ「誰かさん、コオロギと付き合ってたって」

リクコ「ほう誰かさんが」

ソラコ「ねえ誰かさん」

リクコ「あれ、誰かさん？」

ソラコ「あの気持ち悪いコオロギと付き合ってたもんね」

ヒルコ「付き合ってるけど、それが？」

ソラコ「それが？じゃないよ。先生と生徒なんだよねあんた達。

モラルとか考えないわけ？」

ヒルコ「ソラコに言われたくないんだけど」

リクコ「あっ口ごたえ」

ソラコ「別にあんたがどうなろうが知った事じゃないし、

責任なんて微塵も感じないけど。一応友達として忠告」

ヒルコ「責任感じてくれなんて頼んでないよバカ野郎」

ソラコ「コオロギはやめときなよ。あいつ変な趣味持ってるみたいだから。

ま、これも噂だけだね」

☆ヒルコ、ソラコとリクコの間を抜けて舞台のもう一方へ。

そこに、コオロギがいる。ビデオカメラを持っている。

コオロギ「だいじょうぶだ、せんせはソラコとかみたいに、

流したりしないかだ」

ヒルコ「ビデオ？」

コオロギ「嫌かな、い、やっぱり」

ヒルコ「いいよ、別に」

コオロギ「いいやらしい意味じゃなくて、あの、せせんせえ、

忘れっぽくて、こおいうの記録にのこしなきゃ不安で」

ヒルコ「だから別にいいよ」

コオロギ「う、うん、じゃ、回すよ」

☆ソラコ、リクコ台の上でそれを見下ろしながら

ソラコ「結構、一部じゃ有名な話、コオロギ、援交した相手と、
行為した映像をHPにアップしてんだってさ」

リクコ「はあ？犯罪じゃん」

ソラコ「私も先輩から聞いた話だから、よくわかんない。
でも言ってたよ。顔は映ってないけど、あの喋り方、
間違いなくコオロギだって」

コオロギ「ふ、ふ、服にいでみようか」

☆映像に切り替わって、コオロギのアップ

コオロギ「つ、次は、えっと、足ひ、ひらいて、みてれ、
うん、そう。そそ、すいう感じだで。え、ああ、
じゃ、カメラ向けるかー、笑ってみよか」

☆カメラをヒルコの方に向けてる途中で砂嵐
明かりが入る、ヨルコ。

ヨルコ「先輩へ、何通目のお手紙になるでしょうか。
私は相変わらず、毎日コンビニで働いています。
先輩のせいでもあるんですからね！（プンプンしてる絵）
戦況はどうなっていますか？勝ってますか？
私テレビも新聞も見ないから全然わからなくて。
あ、でも、なんとなくですけど。先輩がこの手紙を
読んで笑ってるのは想像できます」

☆明かり広がる、店長がいる

店長「こらこら、何書いてんの？工作中だよ？」

ヨルコ「手紙を書いています」

店長「うん、ダメだよ、仕事の中に書いたら」

ヨルコ「え、あ、そうか、じゃあやめます仕事」

店長「えー？あ、そんな大事になる？この注意。え？凄いな君。
一瞬で混乱したよ俺」

ヨルコ「やめさせてください」

店長「わかった、書いていいよ。だからやめないでね」

ヨルコ「はい」

店長「書きながらでもいいんだけど、ちょっと聞いて。

俺さ、マッサージ屋始めようと思うんだ。

それで、そっちの方で働かないかなあって」

ヨルコ「嫌です」

店長「ちょっと講習あるんだけど、向こうの方がお金いいよ。

専門職だから」

ヨルコ「お金」

店長「どう？」

ヨルコ「お金、先輩、お金、先輩、コンビニで働きます」

店長「今、あ、天秤にかけたの？」

ヨルコ「はい、やっぱり先輩が帰って来た時に、ここでお帰りなさいって

言いたいから」

店長「そっか。山田は幸せもんだな」

☆姫神が入ってくる

店長「あ、客だ、いらっしゃいませ、ネコネコマートへようこそ」

姫神「やっぱりここにいた」

ヨルコ「あ」

店長「あ、タバコですか？」

姫神「いや、俺客じゃなくて、神様だから」

店長「お客様は神様なんですか」

姫神「だから、客じゃねーんだ。こいつこれ渡しに来た」

ヨルコ「なんですかこれ」

姫神「冊子だよ。俺が書いた。神様の教えみたいな」

ヨルコ「(中身を読んで) 幸せのススメ」

☆ヨルコ本をペラペラとめくる

SE時計が進む音

ヨルコ、ふうと、一息ついて本を閉じる

姫神「どうだった？」

ヨルコ「なんで途中からいたずら描き中心になってるんですか？」

姫神「飽きちゃったんだよー」

店長「客こないかなあー」

☆ヨルコに明かり

ヨルコ「先輩へ、姫神さんを何とかしてください」

☆逆サイド、ヒルコに明かり

ヒルコ「先生へ、先生がいなくなった日を今でも思い出す事があります。あの日は家も大変だったから。
先生、どうか自分を責めないで下さい。
先生のおかげで今の私があるんですから」

☆SE遠くでパトカーの音

明かり広がり、ヒルコとヨルコ座る。
その向かい側に緑川(警察)が座る。

緑川「う～ん、まあ、こういうね、デリケートな問題ですから。ねえ」

ヨルコ「他の子は訴えるって言ってるんですか？」

緑川「まあそういう人もいますし、もういいって人もいますし、
こういう事件はね、やっぱり訴える側も勇気が必要ですからね」

ヨルコ「どうすんの？」

緑川「すぐに決めなくてもいいから、こんな事言ったら本当はダメなんだけど、
訴えれば勝てるから。こういうのは。ちゃんと弱い人を守るようになってるから」

ヒルコ「じゃあ訴えませんか」

緑川「じゃあ？」

ヒルコ「恨んでないんで、ていうか、早く出てきて欲しいんで。だから
訴えませんか」

ヨルコ「はあ？」

ヒルコ「私は被害者に数えなくていいです」

ヨルコ「馬鹿かこいつ、あんた自分が何されたかわかってんの？」

緑川「好きなの？」

ヨルコ「？」

緑川「あのコオロギって男の事好きなの？」

ヒルコ「それは答えなくちゃいけないんでしょうか？」

緑川「いや、ごめんごめん聞かなかった事にしてくれ。じゃ、私は
これで、気が変わったらいつでも言ってください」

ヨルコ「いえ、こちらこそなんかすいません。多分この子も気が変わると
思うんで」

☆一つ礼をして緑川はける

ヒルコ「殴る？」

ヨルコ「殴んないよ、ヒルコは被害者なんだから」

ヒルコ「被害者じゃないよ」

ヨルコ「被害者だよ、世間から見たらどっからどうみたってあんたは
被害者のかわいそうな女の子」

ヒルコ「別にどう見られたって、関係ないでしょ」

ヨルコ「関係あるね、世の中どう見られてるかが大半だね。

良く見てもらいたくてみんな頑張ってるんだよ」

ヒルコ「お姉ちゃんも？」

ヨルコ「私だって、そういうの考えるよ」

ヒルコ「コンビニでバイトしてるのにな？」

ヨルコ「どういう事？」

ヒルコ「いい歳してコンビニで毎日働いてるのに。世間の目気にしてるの？」

ヨルコ「しょうがないでしょ？じゃあ誰があんたを食べさせるの？」

ヒルコ「そうやって、またしょうがないを言い訳にしてんだね。

お姉ちゃんは多分、ヒルコがいるからって色んな事を我慢してるん
だろうけど、もう私を言い訳にするのやめて欲しい」

ヨルコ「馬鹿にするな！あんたのせいじゃない、全部私のせいだ。

私の最大限の努力の成果がこれなの。最高到達点がコンビニなの。

その私の山の頂を、低いみたいに言わないでよ！」

ヒルコ「お姉ちゃん、世間の人、そういう風に見てくれないよ」

ヨルコ「……」

ヒルコ「私学校辞めるね」

ヨルコ「……辞めるなら出てって」

☆ヒルコ無言で去る

ヨルコ、移動してレジ打ちを始める。

同時にソラコに明かり。

ソラコ携帯をいじりながら

ソラコ「ヒルコへ、元気ですか。

高校卒業して、私は就職。リクコは大学進学。

渡君は、噂だけどエイズになったと聞きました。

ヒルコの噂も聞くよ。ていうか、たまには遊ぼうよ」

☆ソラコ携帯の送信ボタンを押す。

ソラコ「あっ、返ってきた。アドレス変わってんじゃん」

☆明かりが広がるとリクコもいる

リクコ「届かなかった？」

ソラコ「うん」

リクコ「まあ、もう大分前のアドレスだからね」

ソラコ「うん」

リクコ「うんこしてきていい？」

ソラコ「え？」

リクコ「うんこしたいから、コンビニ寄っていい？」

ソラコ「あ、そういうの言う派だっけ？」

リクコ「うん、うんこする時宣言する派」

ソラコ「私、しない派」

☆店に入る

ヨルコ「いらっしゃいませ」

リクコ「すみませんトイレ借りていいですか？」

ヨルコ「あっどうぞ」

リクコ「うんこするんで」

ヨルコ「はい、どうぞ」

リクコ「すみません」

☆リクコトイレへ

ソラコ「えーと、ペシエってあります？」

ヨルコ「たばこですか？」

ソラコ「あの、桃色のやつ」

ヨルコ「ああ、ありますよ。(後ろの穴から出す)」

ソラコ「はい(お金渡す、名札ガン見)」

ヨルコ「320円ちょうどお預かりします、レシートいります？」

ソラコ「いや、いいです。あの、篠宮ヨルコさんって言うんですか？」

ヨルコ「はい」

ソラコ「篠宮ヒルコ」

ヨルコ「はい、え？ヒルコが何か」

ソラコ「知ってます？」

ヨルコ「妹です」

ソラコ「タイムリー」

ヨルコ「？」

ソラコ「ああ、いや、こっちの話。あの、私高校の時の友達の松井って言うんですけど。ヒルコ元気ですか？」

☆リクコ戻ってきて

リクコ「ダメだ、オナラしか出なかったよー」

ヨルコ「私も最近会ってないからわかんないですよ」

ソラコ「そうなんですか」

リクコ「何話してるの？」

ソラコ「あの」

リクコ「肉まんください」

ヨルコ「あっ、はい。(穴に手を入れる)。あ、ちょっと肉まんまだカッチカチです。すいません」

リクコ「あーそうか、なんか、まんありますか？」

ヨルコ「まんはもうカッチカチなのしか。さっき売り切れちゃって」

リクコ「なんだよー、まん気分だったのに」

ソラコ「あの」

ヨルコ「はい」

ソラコ「ヒルコAV女優になったって本当ですか？」

ヨルコ「え？」

ソラコ「噂なんですけど、本当ですか」

リクコ「マジで？」

ヨルコ「ちょっとわかりません。すいません」

ソラコ「そうですか、あっすいませんなんか」

☆ すごく気まずい感じになって店を出る2人

ソラコ振り返る

ソラコ「やばい、超こっち見てる」

リクコ「ねえさっきのまじ？」

ソラコ「だから噂だって」

リクコ「うわー超見たい知り合いの出てるAV、ソラコも見たいでしょ？」

ソラコ「・・・あんまり」

リクコ「えー、なんで、エロいの好きじゃん」

ソラコ「いや、別に。(時計見て)あっ昼休み終わる」

リクコ「え？今何時？」

ソラコ「2時、15分前」

リクコ「やばい、お祈りの時間だ、やばいじゃん」

ソラコ「お祈り？」

リクコ「言わなかったっけ？なんか大学に神様いるんだよ」

ソラコ「はあ？」

リクコ「神様にお祈りしたらいい事あるんだって」

ソラコ「神様って何？」

リクコ「わかんない、何その質問」

ソラコ「あ、そうだよ。神様って誰？」

リクコ「わかんない、知らない人」

ソラコ「人なんじゃん」

リクコ「うん、人。やばい、タクンないと間に合わない。じゃあちよつと行くから」

ソラコ「あ、うん」

リクコ「仕事頑張ってる」

☆リクコはける

ソラコ「あ、やべ、まだ見てる」

☆映像、よくあるAVの最初の質問シーン、ヒルコ

所々編集してある下手くそな感じ

ヒルコ「春風モモカです、18歳です」

声(又はテロップ)「こういうの初めて？」

ヒルコ「うん、初めて」

声「どれくらい経験してるの？」
ヒルコ「うーん、あんまり、わかんない」
声「わかんないんだ(笑)」
ヒルコ「うん、わかんない」
声「初体験は？」
ヒルコ「うんとね、15」
声「誰と？」
ヒルコ「同級生」
声「彼氏？」
ヒルコ「ううん、なんかノリで」
声「軽いね(笑)」
ヒルコ「軽い？うん、そうかも、そうかも」

☆岡本に明かり

岡本「244番、手紙届いてるぞー。一通も届かないやつも
いるのに、幸せもんだなあ。244……(上を見る)。
あ、首つつてる、ちょっと待って、目シバシバしてる目シバシバしてる。
あ、やっぱりつつてる。」

☆ヒルコに明かり

ヒルコ「先生へ、お元気ですか。私は今、なんだか絶好調らしくて。
こんな私でもやっぱり需要があるんだって。
社会的に一人の人間として生きていいんだって。
先生がそこから出てきたら一番にしたい事は決まってる。
家でゲームをするの、ピザ頼んで、コーラ飲んで
一日中どこにも出かけないで。少し面倒臭くても、
笑って付き合っってね」

☆ソラコが座っている、パソコンを打っている。
(カタカタという音が静かに鳴り響く)

ソラコ「ずっとこんな事をしていると、自分は何の為に生まれてきたんだろう、
とか、晩御飯何食べよう、とか、あのドラマに出てた俳優なんて
名前だっけ、とか考えて、しばらく粘るんだけど、結局わかんなくて、

「仕事なのに、検索して調べたり、人のブログ見て、ああ、この人は昨日楽しかったんだな、とか、ずっと同じ事してる。ずっと同じもの見てる。なんだこの変なスパイラルは」

☆いつのまにか少し離れたところに座っている、熊沢。

熊沢「なあ松井」

ソラコ「なんですか？」

熊沢「女の子ってエッチなビデオとか見るの？」

ソラコ「熊沢さん、なんすかその堂々としたセクハラは」

熊沢「セクハラか？これ。質問だろ」

ソラコ「今日日、まだ結婚しないの？って聞いただけでセクハラになる

このご時世に、その質問はどストライクなセクハラだと思いますけど」

熊沢「俺おっさんだよ？おっさんからセクハラ取ったら何残るよ？

ほとんど何も残らないよ。俺からセクハラを取ったら人間のカスだよ？」

ソラコ「熊沢さんよりバファリンの方が成分的に存在価値がありますね」

熊沢「で、どうなの？」

ソラコ「見るんじゃないですか？」

熊沢「見た事あるの？」

ソラコ「あります」

熊沢「どんどん答えるね」

ソラコ「面倒臭いんで」

熊沢「セックスしてるか？」

ソラコ「どんどんエスカレートしますね」

熊沢「面倒臭いんだよ、気を使うの。で、どうなの？」

ソラコ「(無視)」

熊沢「おい、おっさんに冷たくするなよ。しかも一人身のおっさんだぞ。

防御力低いよ。すぐ傷つくよ。すぐ自分を探す旅に出るよ。

四国とかああいう害の無さそうな所に行っちゃうよ？

お前ん家のポストにこっそりお土産のうどんを入れるぞ。

そういう事するんだよ、一人身のおっさんは。

伊達や酔狂でAV借りて一人で見てるわけじゃないんだよ」

ソラコ「あ、そうだ」

熊沢「京都行くの？」

ソラコ「AV女優で篠宮ヒルコっています？」

熊沢「篠宮？二宮ならいるよ。二宮沙希」

ソラコ「いないですか？」

熊沢「うん、いるかも知れないけど俺が持ってるのには無いな。

最近のお勧めは春風モモカ。春風モモカいいぞ」

ソラコ「知らないっすよ、そんなの」

熊沢「春風モモカのどこがいいかって……………」

☆ソラコがまた考え事をしてる(パソコンカタカタ)

ソラコ「ダメだ」

熊沢「モモカはダメじゃないぞ！」

ソラコ「熊沢さん、ちょっと早いけど、帰るっす」

熊沢「あ、ああ、いいんじゃない？」

☆ソラコ出て行く

熊沢「怒ったの？生理中？」

防御力が無い俺は、怒っちゃったんじゃないかという罪悪感で

頭が一杯になり、仕事が手につかなくなった。

なので、帰る事にした。一人暮らしのおっさんの帰り道は

実に寂しい」

☆明かり熊沢だけになり、熊沢つり革に捕まる

SE電車の音

熊沢「いつもより早く帰ったおかげで、女子高生の帰宅時間に重なった。

これがおっさんの一日におけるもっともラッキーな出来事だ。

松井にもこんな時代があったのだろうか？と考えている内に、

視線を感じた女子高生が警戒のオーラを出しまくり、

俺の両脇を私服警官らしき屈強な男が固めた。

そんな小さな事でこつこつと傷ついていくおっさん。

いたたまれなくなった俺は、いつもより一駅手前で電車を降りた。

家まで歩いて帰ろう、その途中で晩御飯を買おう」

☆舞台上にヨルコ

ヨルコ「いらっしやいませ」

熊沢「その店員は、なかなか俺の好みの女であった。

店員と客と言う関係は便利だ。さっきのうっぷんを晴らすべく、
対コンビニ女性店員用セクハラ作戦を決行する事にした。

(カバンからエロい雑誌を何冊も出す)。

いつもはこんなを買わない。だが、女性店員の勤めて冷静に
対処しようとする姿を少しでも長く見るための量なのである」

☆店長が出てくる

熊沢「ください」

店長「はい、お客さん。(全てを悟ったように)わかりますよ。

(大声で)イッテンニテンサンテン！！」

熊沢「やめてください」

店長「ヨンテン！合計で2568円になります」

熊沢「はい」

☆熊沢投げるようにお金を投げ捨て商品を受け取り出て行く

店長「お客さんおつり！」

ヨルコ「渡してきましょうか？」

店長「いや、俺にはわかる。奴はもうダメだ」

ヨルコ「でも」

店長「優しさが時には人を傷つける」

ヨルコ「なんかわかりませんが、わかりました」

店長「篠宮、マッサージ店な」

ヨルコ「ああ、どうなんですか？調子は」

店長「雇ってたタイ人が勝手に本番しててな」

ヨルコ「はあ」

店長「勝手に商売してたんだよ」

ヨルコ「え？」

店長「タイ人はダメだな。カレーもシャバシャバだし。シャバシャバな

カレーが名物の所の女はヤリマンばかりだ」

ヨルコ「そんな事ないですよ」

店長「俺は決めた、コンビニに命を捧げる」

ヨルコ「店長」

店長「篠宮に何から何まで任せてて悪いなって思ってたんだよ。

俺は誓う、この店に生き、この店に死ぬと！！」

ヨルコ「(手紙を書き始めている)」

店長「んあ！このタイミングで」

ヨルコ「・・・店長がネコネコマートに命を捧げるらしいです」

店長「そうだ、山田に伝えてやれ、店長は素晴らしい店長だとな」

☆松本(松本じゃなくても良い)入ってきて

店長「いらっしゃいませ」

松本「大政啓二さんってこちらにいらっしゃいますか？」

店長「大政は店長のこの私ですが」

松本「ああ、あなたが。えーとあなたに赤紙が来ているのは知っていますか？」

店長「知りません、貰ってません」

松本「四ヶ月前に届いてるはずなんです、これ(ピンクの紙を出す)」

店長「ああ、これは来てました」

松本「赤紙です」

店長「ピンクじゃないか！」

松本「あの、赤紙って名前だけど別に赤いなんて決まりないんで」

店長「赤紙って言ったら普通赤いでしょう」

松本「それはあなたの固定観念でしょう」

店長「だってちょっと赤よりの色じゃないか。意識してるじゃないか」

ヨルコ「(書いてる)今、店長が揉めてます」

店長「冷静だなおい」

松本「明日にでもパキスタンの方に出発していただかないと」

店長「さて、俺は低所得者じゃないぞ、赤紙が届くのは低所得者だろう」

松本「最近はその辺結構アバウトになってきてるんで」

店長「初志貫徹しろよ」

松本「そう言われましても」

店長「今俺は、コンビニに命をかけると決めたんだ」

松本「行かないとなると、罰を受けてもらう事になりますけど」

店長「罰受けようじゃないか。罰を受けてコンビニに命をかける。

それが、男、大政啓二」

松本「去勢していただきます」

店長「罰が重いじゃないか」

松本「去勢の手続きなんです」

店長「行きます」

松本「え？」

店長「戦争に行きます、行かせて下さい、戦争へ」

松本「はい、わかりました。それでは出発の手続きを今から
市役所の方でしていただきますので」

店長「今からですか」

松本「はい、明日出発なんで」

店長「わかりました、しかし、私はこの店長です。少しだけお時間を
ください」

松本「どうぞ」

店長「と、いう事だ」

ヨルコ「え？」

店長「聞いてろよ、結構重要な事だよ？」

ヨルコ「手紙書いてたんで」

店長「じゃあ要点だけ言うぞ」

ヨルコ「はい」

店長「今からお前が店長だ」

ヨルコ「はい？」

店長「俺が帰ってくるまで、お前が店長だ」

ヨルコ「困ります」

店長「こっちの方が困ります！困ってます！」

ヨルコ「だって、私だって、いろいろ将来とか、あるし」

店長「篠宮、こうなったら腹をくくれ」

ヨルコ「う～ん」

☆姫神入ってきて

店長「あ、いらっしやいませ」

姫神「どうも」

☆姫神店内を物色する動き

店長「篠宮、店を頼んだぞ。それじゃあ行きましょう」

松本「はい」

☆ 店長、松本はける

ヨルコ「う～ん、やっぱり無理です！いねえ！！」
姫神「あのさ」
ヨルコ「誰だ！？」
姫神「俺だよ」
ヨルコ「あ、姫神先輩」
姫神「水10万円分欲しいんだけど」
ヨルコ「はあ」
姫神「水」
ヨルコ「あの、この店に10万円分も水ないです」
姫神「じゃあ、あるだけ頂戴」
ヨルコ「え？なんですか？地震対策？」
姫神「いや、ちょっとね」
ヨルコ「じゃあちょっと在庫見てくるんでレジお願いします」
姫神「え？」
ヨルコ「私一人しか居ないんで」

☆ヨルコはける

姫神「え？あれ？店長は？……あれ……えっと、あ、いっらしやいませ」

☆SE戦車が店の前を通る音

姫神「なんだ、戦車か」

☆コンビニ明かり消える。

ヒルコに明かり

ヒルコ「電話、基本でない事にしてる。面倒臭いから。

名前が出ない人の電話は出ない。

なんかそういうのどうでも良くてさ、だからもう会わないと

思ってたよ。なんか飲む？」

☆明かり広がる、ソラコがいる

ソラコ「いない」

ヒルコ「なんで知ってるの？家」

ソラコ「聞いた」
ヒルコ「誰に？」
ソラコ「噂」
ヒルコ「噂か、そういうの得意だもんね」
ソラコ「知らない事があるとイライラするんだ」
ヒルコ「噂は知識じゃないでしょ」
ソラコ「知ってるよ、噂は噂。でも本当もあるじゃん。こういう風に」
ヒルコ「怖いね噂」
ソラコ「昔はさあ、もっとなんかそういうのにびびってたよね。
噂が人格もって一人歩きしちゃうっていうの？
あいつは何々だなんて日常茶飯事でだった」
ヒルコ「私はヤリマン？」
ソラコ「そんな噂あったね」
ヒルコ「噂じゃないよ、ソラコ。知ってるから来たんでしょ？」
ソラコ「イライラする」
ヒルコ「？」
ソラコ「すげー探したよこれ」
ヒルコ「TUTAYA」
ソラコ「やめなよ」
ヒルコ「それ言いに来たの？」
ソラコ「それ言いに来たし、実行させに来た」
ヒルコ「なんでいつもそんな無理矢理なの？」
ソラコ「昔の無理矢理を戻しに来たの。私、今さあ、すげー給料安い所で
事務やってて、あんまし将来性ないけど。少しずつ頑張ってるんだ」
ヒルコ「いいじゃん」
ソラコ「モヤモヤしてんの、あんたがそんなんだと私がいくら真っ当に
生きて行こうと思ったって無理じゃん。でも過去じゃんあんなの」
ヒルコ「うん過去じゃん」
ソラコ「過去じゃないじゃん」
ヒルコ「無茶苦茶いうね」
ソラコ「ヒルコが不幸だと、私のせいみたいじゃん。
頑張ってる過去にしようとしてるんだから、引きずるなよ」
ヒルコ「不幸？」
ソラコ「そう、そうやって不幸見せつけるの、やめてくれる？」
ヒルコ「馬鹿にするな」
ソラコ「？」

ヒルコ「馬鹿にするな！！決め付けないでくれる？不幸だって。
AV女優みんな不幸なの？私幸せだよ。ソラコのせいで私
AV女優なの？思いあがらないでよ、これは私の実力で奪い取った
仕事なんだから。ご飯食べてるんだよ、下の口で食べ、上の口で
食べてんだよ。ソラコ何してるんだっけ？事務でしょ？
ソラコじゃなくてもできるじゃん、私の仕事は私じゃないとダメだっていう人がたくさんいるよ。
私で戦ってるの。単体で戦ってるの。
お金だってソラコより全然稼いでるよ。ソラコの方が不幸なんじゃない？」

ソラコ「本当にそう思ってる？」

ヒルコ「思ってるよ、別にソラコなんて私の人生にまったく影響してない。
そう思われるだけ心外、私の人生はいつも私が決めてるんだから」

ソラコ「じゃあさ、私があんな事しなくても、そうなった？」

ヒルコ「……うん」

ソラコ「絶対？」

ヒルコ「うん」

ソラコ「なんか、原因それじゃなかったみたい、だってまだイライラしてるもん」

ヒルコ「無駄足だったね」

ソラコ「まださあ」

ヒルコ「ん？」

ソラコ「コオロギの事好きなの？」

ヒルコ「……好きだよ」

ソラコ「忘れなよあんなやつ」

ヒルコ「忘れないよ、私の唯一の居場所だから」

ソラコ「居場所？」

ヒルコ「うん」

ソラコ「え？もしかして知らない？」

ヒルコ「なに？」

ソラコ「コオロギ死んだんだよ」

ヒルコ「……」

ソラコ「新聞とか読まないの？あいつ、刑務所で首つったんだって」

ヒルコ「……」

ソラコ「知らなかったんだ」

ヒルコ「じゃあ私も死ぬ」

ソラコ「え？」

☆ヒルコ窓を開けて飛び降りる

ソラコ「ちよっ！」

ヒルコ「地上11階、多分相当に高いところから私は身体を投げ出した。

それはこの世に居場所をなくした人間がする極々当たり前の、
生きていくのと同じくらい当たり前の行為で、
私は人生の中で一番自由な空間にただただ一つの点になって
浮かんでいた。こんなに全身で空気を感じるなんてなかったものだから、驚くほどに気持ち
が良かった。そう、まさに、セックスで
逝く時のようなあの感じ。ああ、逝くって上手い表現なんだなあと、
この時初めて感心した。多分そんなに時間はなかったんだろうけど、
上には何も出来ないでただ覗き込んでいるソラコの顔がはっきりと
見えたし、ああ、お姉ちゃんに結局お別れを言えなかったとか。
明日は新聞に載るんだろうとか、どうでも良い事を考える時間は
たくさんあった。死んだら何をしよう、とりあえず、先生に会いに行こう。それから、と考えて
いる時に、私は地上0センチに到達した」

☆SE鈍い音、同時に暗転。

SE遠くからのサイレン

ヨルコに明かり、ヨルコ手紙を書いている。

ヨルコ「先輩へ、お元気ですか。なんだか色々あって、

私はネコネコマートの店長になりました。

びっくりしましたか？私の方がびっくりしましたよ。

それよりも店長の方がびっくりしてましたけどね。

あっ、店長っていうのは、前の店長の事ですよ。

(少し考えてから)

あ、そうだ、赤紙ってピンクだったんですね。

店長はそれに気付かなかったせいで全身の体毛を剃られて

戦場に連れて行かれたそうですよ。

という手紙を書いている時に、その電話は鳴りました」

☆電話の音

ヨルコ「あ、はい。篠宮ですけど」

☆音楽、はけるヨルコ。

舞台上、リクコ電話で話している

リクコ「うん、だからまじだってば。少し高いけど、
これ飲んでると、、、ちょっと待って、(ポケットからメモ出して)
金運が上昇して、健康が良くなって、うん、良くなる。
あと、宝くじが当たる、癌にもならないんだって。
まじで」

☆渡が横切る

リクコ「あ、渡くん。渡君！！」

渡「あっ、村井」

リクコ「(電話に)うん、ちょっと懐かしい知り合いに遭遇したから
また電話するね。はいはい。(切る)どうもー」

渡「おお」

リクコ「あ、渡君エイズになったってまじ？」

渡「俺それよく言われるんだけど、どっから噂流れてんの？
松井？」

リクコ「ソラコも誰かに聞いたんだって」

渡「エイズだよ俺」

リクコ「まじで？やばいじゃん死ぬじゃん」

渡「それがなかなか死なないのよ、この病気。徐々になって感じ」

リクコ「はじめて見た生で、ドキュメントでしか見ないじゃんそういうの。
サイン下さい」

渡「サイン？」

リクコ「うん、サイン」

渡「何に？」

リクコ「あ、じゃあこの Condom に」

渡「Condom に？」

リクコ「Condom にエイズ渡って書いて」

渡「お、おお」

☆サインする渡

リクコ「超シュールじゃんこれ」

渡「あの時着けてさえいれば……」

リクコ「超ウケル」

渡「ウケルなよ」

リクコ「あ、あああ、あ！ そうだよ、君こそだ」

渡「何？」

リクコ「この水、治るかもよエイズ」

渡「はあ？」

リクコ「凄いんだって、一本一万円するけど、週一で飲めば、
健康が強くなって、金運が鰻上るんだって」

渡「何これ」

リクコ「ひめが水」

渡「治るのエイズ？」

リクコ「治るんだって」

渡「これで治るの？」

リクコ「治るんだって」

渡「まじかよ」

リクコ「まじだって」

渡「見せて」

リクコ「いいよ」

☆一気飲みする渡

リクコ「おうい！」

渡「あ、なんか、肌がしっとりした気がする」

リクコ「でしょ？ ちょうど今日お祈りの日だから来てみる？」

渡「あ、うん、行く」

リクコ「じゃあ来い、おぬし、こっちじゃ」

☆リクコの案内ではける渡

逆方向からヨルコ入ってきて

ヨルコ「ただいま(振り返るヨルコ)」

☆ヒルコ、松葉杖で包帯だらけで入ってくる

ヒルコ「お邪魔します」

ヨルコ「ただいまでいいよ」

ヒルコ「お邪魔します」
ヨルコ「(ヒルコをビンタ)」
ヒルコ「痛い、ただいまあ！」
ヨルコ「死ぬな！！死のうとするな！なんだそれ！
しばらく連絡取れないと思ったらAV女優になってて？
そんで大怪我してんの？馬鹿野郎！」
ヒルコ「死にたかったから」
ヨルコ「死にたくて死んでいいほど甘くないんだよ人生。
じゃああんた生まれたくて生まれてきたの？
違うじゃん。人間は生まれたくもないのに生まれてきて、
死にたくもないのに死ぬもんなの。それが理なの」
ヒルコ「だって」
ヨルコ「だってだ？」
ヒルコ「ヒルコの地球はもう壊れました。もう立つ場所がないから。
もう立たなくていいんです」
ヨルコ「死ねなかったじゃん」
ヒルコ「死ねなかった」
ヨルコ「死ぬなって言ってんだよ。神様が。
奇跡だよ、たまたまマンションの下になんかやわらいあのなんだか
よくわかんないのがあったから助かったんだよ」
ヒルコ「なんであんな所に、やわらかくて大きい何かがあったんだろう」
ヨルコ「あったんだよ、やわらけえのが。
そもそもそんな壊れるような地球に乗るな、選べ」
ヒルコ「一つしかなかったんだもん地球」
ヨルコ「ヒルコの地球は私だ、ずっとそうでしょ？ヒルコの地球は私、
私の月はヒルコ」
ヒルコ「ずるいよ、逆にしてよ。そもそも、コンビニで働いてる地球なんて
嫌だ」
ヨルコ「AV女優に言われたくないよ」
ヒルコ「AV女優の方がお金稼げるもん、グレードが上だよ」
ヨルコ「AV女優がそんなに偉いのか！」
ヒルコ「コンビニ店員がそんなに偉いのか！」
ヨルコ「店長だよ！」
ヒルコ「あ、店長なの？」
ヨルコ「店長よ」
ヒルコ「処女なのに」

ヨルコ「……処女店長よ」

ヒルコ「店長が処女のコンビニなんて嫌」

ヨルコ「ヒルコ、あんた怪我治ったらうちで働きな」

ヒルコ「嫌だ」

ヨルコ「じゃあどうすんの？もう続けられないよ今の仕事」

ヒルコ「続ける」

ヨルコ「あんたはたまたまマンションの下にあった鋭利な何かで切って

身体に傷が残っちゃうんだから、もう無理だよ」

ヒルコ「じゃあ死ぬ」

ヨルコ「死ぬの禁止、逃げるの禁止」

ヒルコ「嫌だ」

ヨルコ「嫌だ禁止」

ヒルコ「処女なのに偉そう」

ヨルコ「処女だから偉いの、この処女は守った処女だから。

勝ち取った処女だから。この処女はあげる人が決まってる処女だから」

ヒルコ「あの手紙送ってる人？」

ヨルコ「そうだけど」

ヒルコ「戦争行った人の為に処女守ってるの？」

ヨルコ「うん」

ヒルコ「戦時中かよ」

ヨルコ「戦時中だよ」

ヒルコ「お返事返ってきた？」

ヨルコ「……来てない」

ヒルコ「死んでるかもね」

ヨルコ「生きてるよ」

ヒルコ「死んでた、ずっと手紙送ってたのに」

ヨルコ「それ、辛いね」

ヒルコ「死んでた」

☆ヒルコ思い出したかのように泣く

ポケットから汚いティッシュを出して、ヒルコに渡すヨルコ。

ヒルコ一度受け取って物を確認して使わずに捨てる

暗転。

☆ 映像、なんかいい曲かかって、幸せそうな外国の子供たちの映像。

できれば姉妹がいい。

映像終わり、ソラコ、リクコ向かい合っている

ソラコ「だから買わないっつーの」

リクコ「買いなよ」

ソラコ「入んないっつーの」

リクコ「入りなよ、私の友達で入ってないのソラコだけだよ」

ソラコ「入るぐらいだったら友達辞めるっつーの」

リクコ「ソラコは前世が陸亀だって出てるのね、うちの方法では」

ソラコ「名前にリクコの方がそうだろうよ」

リクコ「だから、イライラするの」

ソラコ「イライラしてんのは馬鹿な友達が多すぎるからだよ」

リクコ「前世が陸亀だからだよ」

ソラコ「なんでだよ、なんで前世が陸亀だとイライラするんだよ」

リクコ「亀だから」

ソラコ「あーイライラする」

リクコ「この水を飲むとね」

ソラコ「いいよもうそれは」

リクコ「渡君なんてまだ生きてるんだよ？これ飲んで」

ソラコ「なかなか死なないよ人間は、マンションから飛び降りたって
死なないんだから」

リクコ「私今度幹部になるんだ」

ソラコ「おい、バカ。リクコさあ、いくら買いでんの？」

リクコ「献金？」

ソラコ「なんでもいいよ、お金」

リクコ「月30万円かな」

ソラコ「30万円あったら何できるよ」

リクコ「違うの、入ってるから30万余分に稼げてるの。

入ってなかったら稼げてないもん」

ソラコ「勘弁してよ、面倒臭いよ。あんたといい、ヒルコといい。

なんで普通に生きられないの？」

リクコ「これが普通なんだよ、ソラコの方が無理してるように見える。

だって私はイライラしないもん。信じるものがないから

イライラしてるんでしょ？知ってるよ」

ソラコ「リクコさあ、仲間増やして友達無くしてどうすんの？」

リクコ「友達って何？」

☆ソラコ、リクコから水を奪って、リクコの頭からドボドボかける

ソラコ「治れ頭」

☆ソラコ、リクコの照明消える

ヨルコ、コンビニでレジを打つ。その音。

ヨルコ「先輩へ、生きてますか、先輩へ、元気ですか、
先輩へ、今何をしていますか、先輩へ、空は今何色ですか、
先輩へ」

☆走って入ってくる姫神

姫神「篠宮、やっただ」

ヨルコ「？」

姫神「見てくれ、認められたぞ。国に。宗教として」

ヨルコ「はあ」

姫神「これで俺も神様として認められたって事だ。

何故神様を目指していたのかは忘れてしまったが、
お前だけには伝えておかなければいけないような気がして」

ヨルコ「忘れたんですか？」

姫神「え？」

ヨルコ「人間そう簡単に忘れませんか？」

姫神「何？どうした？」

ヨルコ「強く抱いていた気持ちも無くなってしまいますか？」

姫神「どうだろうな」

ヨルコ「男は皆そうですか？」

☆いつの間にか姫神の胸倉を掴んでいるヨルコ

姫神「何を言っているかわからないが、神様の胸倉を掴むなよ」

ヨルコ「(離して)あ、すいません」

姫神「とにかく、そういう事だから」

☆帰ろうとする姫神

ヨルコ「あの、姫神先輩がなったのって、神様じゃなくて、
教祖ですよ」

姫神「(止まる)」

ヨルコ「人間は神様になれないんですよ」

姫神「あ」

ヨルコ「先輩は教祖になったんですよ」

姫神「思い出した……けど、あ、もうダメだ」

☆変な空気になる

ヨルコ「先輩……うちでバイトしませんか？」

姫神「……よろしく……お願いします」

☆姫神移動、その先にリクコがいる

姫神「という訳で、今日からお前が教祖だ」

リクコ「え？」

姫神「もう引退しようと思う」

リクコ「だってこの前申請通ったばかりじゃないですか」

姫神「気付いてしまったんだ、村井、お前には才能がある」

リクコ「え？まじっすか？」

姫神「まじで」

リクコ「私が、神様に」

姫神「神様じゃない、教祖だ」

リクコ「やります、やらせてください」

姫神「頼んだぞ、新教祖、俺はバイトの時間だ」

☆姫神去る、リクコ移動する、先にソラコがいる

リクコ「という訳で、私教祖になったんだ」

ソラコ「……治んなかったか」

☆SE学校のチャイム

2人座る、包帯だらけのヒルコが駆け込んでくる。

顔をあわせない2人。そこにコオロギが入ってきて。

国語の教科書を読み始める。太宰治「人間失格」第一の手記冒頭。
その声が少しずつ小さくなっていき

ソラコ「眠くて授業を受ける気が起きなかったあの日。
欠伸をしながらも、この時間がとても有用である事に
私は気付いていた」

リクコ「私たちは気付いていた」

ヒルコ「だけど私たちは」

3人「それを無視したんだ」

☆ヨルコがレジにいる。

ヨルコ「先輩へ、これが初めての手紙になります。生きてますか。
死んでませんか。死んでいたらこの手紙はどうなってしまうので
しょうか」

☆ コオロギに当てられて、続きを読み始めるリクコ。
しかし受け継ぐのはほんの少しだけで、セリフに変わる。
まるで読んでいるかのようなセリフ。

リクコ「小さい頃にいつか死ぬってわかった時の絶望を、もう
私は忘れています。生まれて初めて見た夢をもう私は忘れています。
何故ならそれは面倒臭いからです」

☆リクコのセリフ中に次第に人が減っていく。
コオロギいなくなり、ソラコもはける。
ヒルコは包帯を少しずつ解いていく、ヒルコの話ははじめぐらいで
リクコもはける。

ヒルコ「包帯を解く時にいつもね、傷が出来た時の痛みがどんなもんだったか
思い出そうとするんだけど、びっくりするぐらいに思い出せないんだよ。痛かっただろうって
いう、すごく客観的な回想しか出来なくて、
ああ、だから人間は同じ事を繰り返すんだって思うんだ。」

☆SE時計の音

ヒルコ「痛い思いをした自分は他人、私は包帯を取ればまっさらになって。

またきつといつか包帯を巻くんだろう。(解いた包帯の形を見て)

あ、無限」

☆レジの音がまた聞こえる、時計の音と混ざる

ヨルコ「先輩へ、生きてますか、先輩へ、元気ですか、

先輩へ、今何をしていますか、先輩へ、空は今何色ですか、

先輩へ」

ヒルコ「無限、無限」

ヨルコ「生きてますか、先輩へ、元気ですか、

先輩へ、今何をしていますか、先輩へ、空は今何色ですか」

ヒルコ「無限……」

☆熊沢が店に入ってくる

ヨルコの言葉は加速して。

ニヤニヤしながらエロ本をレジに差し出す熊沢。

ヒルコヨルコ「ああああああああ！！」

☆ヨルコは、エロ本を、ヒルコは包帯を放り投げる

熊沢「おい、商品だぞ」

ヨルコ「うわああああああ」

☆ ヨルコ、エロ本を破る

熊沢「ちょ、ちょまで！！おい」

ヒルコ「もう痛くないのに」

ヨルコ「ああああああああ」

☆ヨルコ走り去る

熊沢「ちょっと君—！！どこ行くんだー」

ヒルコ「もう痛くない傷、でもね、ずっと残るんだよ」

熊沢「どうするんだこれ……」

☆熊沢エロ本を拾う

ヒルコ傷の辺りを触って

ヒルコ「お前はなんで生まれてきたの？」

熊沢「これは万引きじゃないぞ……違うからな……」

☆エロ本を拾い集めて去っていく熊沢

ヒルコにだけ明かりが残り

ヒルコ「お姉ちゃんが帰って来ない。そんな日が何日も続いて。

私はまた居場所を失った事に気付いた。

でも不思議なんだ。絶望的な気分にはならなかった。

寧ろ逆で、なんだかもっとポジティブな気持ちになって。

今度は自分で居場所を探そうか、なんて思ったんだ」

☆明かりが広がると、向かいに姫神が座っている。

姫神、いくつか商品を持っている

姫神「で？」

ヒルコ「で？って言われても」

姫神「で？って言われてもって言われても」

ヒルコ「ここで働かせてください」

姫神「はあ？」

ヒルコ「面倒臭いな」

姫神「こんなに万引きしといてよくそんな事が言えるな」

ヒルコ「これはきっかけです」

姫神「まあ、気持ちはわかる、お前コミュニケーションヘタクソな。

そういうやつ五万と見てきたからわかるよ」

ヒルコ「(じーっと見る)」

姫神「でも、今店長いないのよ」

ヒルコ「知ってます」

姫神「で、なんでコンビニなのよ？女なら色々あるだろ働き先が、

なんでコンビニなのよ」

ヒルコ「お姉ちゃんがいなくなっちゃって」

姫神「俺も大切な、って言ったら今更か。なんかそんな人がいなくなった」
ヒルコ「私も大切な人いなくなった」
姫神「その、お姉ちゃんだろ？」
ヒルコ「先生」
姫神「先生？」
ヒルコ「好き、だった人」
姫神「俺も、好き、だった人がいなくなった」
ヒルコ「でもさ、今話してて思ったんだけど、忘れるよね、少しずつ」
姫神「俺は忘れてたんだ」
ヒルコ「私、その先生がいなくなった時、もう生きるのいいやって思ったんだ」
姫神「なんでこう物事が上手くいかないかな、順調に行ってると思ってたのに
大事なことを忘れてた」
ヒルコ「でも今、私は生きてるよ、生きようって努力を身体がしてる」
姫神「そんでさ、思い出せたんだけど、あるじゃん、時を逃すっていうのが」
ヒルコ「自分で自分を生かすの、誰の力も借りないで、誰にも必要とされないで。」
姫神「それでも後悔するよ、いなくなったらさあ。言えばよかったんだよ。
ダメでもさあ」
2人「なんでそれに気付かなかったんだろう」
姫神「それで、コンビニ、な、訳だ」
ヒルコ「うん」
姫神「俺も色々あってコンビニな訳だよ」
ヒルコ「名札」
姫神「ん？」
ヒルコ「姫神さんって言うんだね。神様みたい」
姫神「コンビニの店員だよ」
ヒルコ「神様ってさ偉いんでしょ？」
姫神「24時間人の生活を支えてるんだ、コンビニだって神様だ」
ヒルコ「馬鹿みたいな発想」
姫神「コンビニは人間じゃないからさ、神様になれるんだ」
ヒルコ「じゃあ、コンビニは私の居場所にだってなってくれる？」
姫神「名前」
ヒルコ「？」
姫神「名札作らなきゃダメだろ」
ヒルコ「篠宮」
姫神「篠宮・・・」
ヒルコ「篠宮ヒルコ」

姫神「お姉ちゃんどこに行ったか知ってる？」

ヒルコ「知らない」

☆暗転、電話の音(かけてる側の受話器から聞こえる音)

SE「おかけになった番号はピッププープー……」

明転、ソラコ、高校のアルバムにマジックで×をつける。
どうやら、クラスの友達一人一人に電話をかけているようだ。
ビールを飲んでる。
また電話をかける。

SE「おかけになった番号は……」

またアルバムにマジックで×をつける。
掛からなかった相手には×をつけているようだ。
また電話をかける

SE「ツーツーツー」

またマジックに×をつける。
ビールを一気飲みし、寝転がる。
アルバムが客側に開かれるようにパサツとなる。
ヒルコとリクコ以外全員に×がついていて、
渡りのところだけ、「エイズ」と書かれている。

☆明かりがサスになり、そこにヨルコが走り入ってくる。

走る。走る。ヨルコ。

ヨルコ「なんでそんな事に気付かなかったんだろう。

気付かないふりをしていただけかもしれないし、
本当に気付いていなかったのかもしれない。
それさえもわからない程に私は気付いていなかった。
だから、それに気付いた私はもう走るしかないでしょう。
渡さなきゃいけないんだ。この手で渡さなきゃ。
私は待っていたんだ。多分、それは、何を、ではなくて、
何でも、を待っていたんだ。
それでいいよ、と言われれば私はきっと、
母親の子宮から出ずに、そこで丸くなり、ずっと出てこなかったに

違う。そこにいれば、いい事も、悪い事も、全部見ないで、
誰かが私を必要としてくれるのを待つことが出来るから。
でも何もしない私を必要としてくれる人なんて
この地球上にはいない。必要としてくださいと叫ばなきゃ、
誰も気付いてくれない。
だから私は走る、渡さなきゃ、そして言わなきゃ、
私を必要としてください、私を必要としてください。
そうすれば先輩はきっと、私を抱きしめてくれるから。
日本を出て、私は空を飛び、そして陸を走った。
イスラエルに渡るとそこは真昼間で、市街地は閑散としていた。
まるで、戦争とはまったく関係がないかのように
時間が日本の何倍もゆっくりと流れていた。
私が手紙を出し続けていた場所まであと少し。
私は気付いていた。生まれて初めてこんなに走った。
静けさの正体はきっと走ってる私の足音、崩れた壁の今はもう
やっていないレストラン、電球が壊れた街灯、もう日本では
走っていない古いタイプの日本車。
私は気付いていた、完全に迷子になっている。
それでも闇雲に走り続け、時間の感覚もなく、途方にくれて
疾走する私の耳に、聞きなれた音が近づいてくる。
戦車の音、毎日コンビニの前を走っていた、日本の戦車の音」

☆立ち止まるヨルコ

ヨルコ「動けなくなった。目の前に迫ってきた戦車に先輩が乗っていたから。
脳みその回線が完全に遮断されたみたいに、動けなかった。
私はここまで来て、この土壇場で、待った。
先輩がこっちに気付くのを待った。
先輩がこっちを見たような気がして、ようやく身体が動いた。
「先輩！！」と私が叫び手を振るよりも早く、
私の斜め後ろに停車していた古いタイプの日本車がアクセルをふかす
音が耳に飛び込んできた」

SE爆発音

☆ヨルコ派手に吹き飛ばす(何かスローモーションで印象的な感じでもよし)

山田が走ってくる

山田「大丈夫か！！」

☆ヨルコを抱きかかえる山田

ヨルコ「えあ……おえ…ああ」

山田「しっかりしろ、しっかり」

ヨルコ「ああ……手紙……」

☆ヨルコ、ポケットから手紙を出す、それはもう燃えカス。

ヨルコ「これを……」

山田「ゴミじゃないか」

ヨルコ「読んで……おお……ああ(ぐったり)」

山田「おい、おい、しっかりしろ」

☆医者が入ってきて

医者「どうしました？」

山田「あなたは？」

医者「私は偶然通りかかった医者です」

山田「ちょうど良かった、この人が爆発に巻き込まれて」

医者「私の医者としての嗅覚がここに足を運ばせた、という事か。

さがっていないさい。……」

☆ヨルコの身体中にハーネスを付けていく

医者「これは……助からんな」

山田「ええ！！」

医者「もう死にかけている」

山田「どうか助けてあげてください、この人、俺に何かを伝えようと

しているんです」

医者「戦場には助かる命と助からない命がある。助からない命を助けようとするば、助かる命が助
からなくなるかもしれない」

山田「はあ？」

医者「私は人間である前に、一人の医者だという事だ」

山田「……はあ？」

医者「それでは、私は先を急ぐので」

山田「おい、おいっ、おい～」

☆医者はける

山田「おい、死ぬな、死ぬな君」

ヨルコ「私は満足していた、この先輩との肌の密着具合は

処女の私にとって未開拓ゾーンだったからです。

ドキドキはしませんでした。リアルに心拍数が弱っていたからです。

処女の私の死に際の未開拓ゾーン。

私はこれをセックスとします！！」

☆壮大な曲が流れて、ヨルコは浮き始める

山田「あ、息してない……」

ヨルコ「最後にして最大の妥協をした私は宙に浮いた。

身体が軽くなった。これが絶頂だと言えそうかもしれない。

これは多分開放なんだ。

私の、私という人生からの開放。

心臓が機能を停止したにも関わらず、私は今、

最高にドキドキしている。だって、ここからは

予想のできない事が私を待ち受けているに決まっているから。

可能性を失った私の魂が、また無限の可能性を手に入れる。

きっと次は上手くいく。そんな根拠のない自信が

私を包んでいる。

驚くべき事に、コンビニを飛び出してから、私は

ヒルコの事をさっぱり忘れていた。

そして思い出した時、それはもうどうでもいい事になった。

私は待つ人から、攻める魂に変わったのだ。

そんな事を考えている最中に」

☆暗転と無音

ヨルコ「突然の暗闇に包まれ、

私の形も魂も記憶も未来も何もかもが完全に消滅した。
私は無くなった」

☆スクリーンに文字

「お姉ちゃんへ

今どこにいますか？

元気ですか？

そこからは何が見えますか？

幸せですか？

私はね、コンビニで働き始めたよ。

お姉ちゃんの店で働き始めたよ。

そして、もう逃げないために、

私は目標を作った。

お姉ちゃんが帰ってきたら、

この店に帰ってきたら、

「お帰りなさい」って言うの。

それが目標。

ヒルコが地球で、ヨルコが月。

そうなれば、いいと思ってるんだけど。

よく考えたら地球と月って

永遠に交わらないんだよね」

☆明かりがつく、そこはコンビニ
SEレジの音、ヒルコがレジにいる。

ヒルコ「(真顔で)ありがとうございました、またお越し下さい」

☆SE店の前を戦車が通っていく
姫神が入ってきながら

姫神「いつまで続くのかねえ」

ヒルコ「なにが？」

姫神「戦争」

ヒルコ「永久に、じゃないですか？」

姫神「ま、どうでもいいけど」

ヒルコ「姫神さん」

姫神「ん？」

ヒルコ「なんでこの店の水は高く売れるんですか？」

姫神「あ？ああ、なんでだろうな」

ヒルコ「あ、(真顔)いらっしやいませ。ニコニコマートへようこそ」

☆姫神に頭を叩かれるヒルコ

ヒルコ「？」

姫神「バカかお前」

ヒルコ「なんですか？」

姫神「もっと笑え」

ヒルコ「ああ」

☆ ヒルコ何となく納得した様子でぎこちない笑顔を作る
それはとてもぎこちないが。
彼女の精一杯の笑顔なのは確かである。
暗転

☆明転すると、谷口健太郎が立っている。

谷口「本日はご来場ありがとうございました！！」

頭を下げる。

拍手が鳴り止むまでは頭を下げる。

頃合を見て頭を上げ。

谷口「少しだけ、お時間を下さい。

世界中ではまだまだ戦争が起こっています。

僕達の知らない場所で小さな命が失われています。

想像してください。

一つの爆弾で、たくさんの未来が、希望が、
失われているんです。

これは決して僕達に関係の無い話ではありません。

なぜ地球が丸くなったか、大地が一直線じゃないのか。

それは世界を繋ぐためです。

僕たちは同じ地球にいるんです。

みなさん一人一人に世界を救える可能性があります。

どうかその可能性を捨てないでください。

奇跡を起こす人間になってください。

それがこの芝居の、

そして僕の言いたかった事です。

谷口健太郎でした。

本日は誠にありがとうございました！！！」

☆ゆっくり深々と礼をする谷口健太郎

感動的なラスト。

谷口「オールキャスト！！」

☆谷口健太郎が手を広げるとキャストが出てくる。

谷口健太郎が胸から一輪のバラを抜き、

一人の客に手渡す。

皆、無言で普通に頭を下げる。

暗転